様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４５２７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２７０７

研究課題名（和文）エニセイ川流域諸民族の言語接触に関する基礎研究

研究課題名（英文）Fundamental research on the language contact between peoples of the Enisei basin

研究代表者
松本　亮（Matsumoto, Ryo）

神戸山手大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：３０７４５８５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：ロシアのシベリア西方にあるエニセイ川流域には少数民族である、サモエード語族のネネツ人とツングース語族エヴェンキ人が隣接して居住する。本研究課題では、この地域における両民族の言語接触の状態について、言語学的視点からの可能性を示した。また、まだ日本語による資料のほとんどない、ネネツ語の言語学的データを整理し、学習書や初級辞書の作成を試みた。さらには、ネネツ人と西と南で接する、同じウラル語族ウゴール語派ハンティ語も調査対象に含めた。初期的調査であるデータを発表した、後継の科研費課題で研究を進める。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで日本では取り上げられることのなかったエニセイ川流域の民族接触状況を報告したことは、言語学的意味のみならず、モンゴロイド系民族の移動の歴史や文化学にも資するものである。日本語とも言語類型論的に類似するサモエード諸語の言語データの提供や、言語接触による言語変化の例の提示は、言語学的にも興味深い事実である。入門の学習書や辞書の作成は、非専門家への研究成果の還元という点からも、社会的意義があると言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：In the lower area of river Enisey, between Krasnojarsk Kraj and Yamalo-Nenets Autonomous Okrug, Russia, Nenets (Samojedic, Ural language family) and Evenki (Tungusic) live adjacently as the endangered languages. In this project I showed from the linguistic perspective that there was a possibility that the two languages groups were in contact during their historical racial migration. I collected and handled the Nenets data and linguistic materials by the field research, and compiled the Nenets grammar textbook with a dictionary for beginners. After that I initiated to research Khanti (Ugric, Ural language family), which lives next to Nenets and have the heavy language contact even now. I have already presented the report of Khanti phonology, in addition it will be included in my following new Grant-in-Aid for Scientific Research Project.

研究分野：言語学

キーワード：記述言語学　フィールド言語学　シベリア　少数民族

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題の申請者は、ツングース諸語エヴェンキ語を主たる研究対象言語として研究を続けてきた。ロシアやフィンランドでの留学を経て、現地の研究者や話母語話者との交流を通し、エヴェンキ語と他の言語の言語接触について研究テーマをしぼり進めてきた。そのような中、エヴェンキ語が話されている領域の西の端であるエニセイ川を境として、その西側広がるウラル諸語との接触地域は、まだ詳細な研究も少なかった。アルタイ諸語としてもまとめられるツングース諸語と、ウラル諸語は言語学的に相互のよく似た現象を持つ言語グループであるが、歴史的・系統的な関係は証明されていない。その一方で、エニセイ川流域のウラル語族サモエード語派に属する民族は、ツングース諸語エヴェンキ族と共通するモンゴロイド系民族である。こうした相違を解明するためには、現地でのフィールド調査とサモエード諸語の基礎的な研究が必要であると考え、本研究課題の計画を立案した。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、エニセイ川流域の言語学的側面からの民族接触や民族交流史について考察するための、基礎的な言語データの整理を行うことである。

ツングース語族エヴェンキ語は、2002 年のロシア国勢調査によれば、民族人口約 3 万５千人に対し母語話保持率はわずか２０％の７千人とされており、諸先行研究をまとめれば、歴史的にモンゴル北部、バイカル湖東部が民族の故地とされている（下地図の PTun）エヴェンキ語は、この内北部シベリアへ広く広がった言語で、その西方の一派がエニセイ川に達したとされる。一方のウラル語族サモエード諸語は、西シベリアのオビ上流が民族の故地（下地図の TSam）とされ、北方へ移動、分布した。この中で多数を占めるのがネネツ語であり、同国勢調査によれば民族人口約 4 万人に対して、母語保持率は７０％を誇る。

このような民族接触の可能性がある地域で民族の歴史を解明するためには、文化人類学や歴史学、遺伝人類学などの学際的な研究が必要である。本研究課題は、その一端を担うべく、言語学的な見地からの両言語の基本的な言語特徴をまとめる必要性を見出すに至った。まず、本研究の着想以前から従事してきたエヴェンキ語に関しては十分な資料があるが、ネネツ語に関してはまた十分な資料がなかったので、フィールド調査による言語記述を目的とした。また、日本人による、日本語で読める文献もなかったため、この地域に興味関心を持つ、言語学が専門ではない人へ提供できるような言語的データを提示することも目的の一つとした。そして、研究結果の発表ももちろん目的の一つである。

３．研究の方法

ネネツ語の言語記述の方法としては以下のことを主に行った：

①現地での母語話者インフォーマント協力を含めたフィールド調査（一次資料）

②ネネツ語の民族語教科書や文法書、辞書、テキスト集の言語資料の収集（二次資料）

フィールド調査地としてロシア連邦ヤマロ・ネネツ自治管区サレハルド市を選び、4 回の渡航を行った。地元行政庁との連絡、博物館や研究所の人との知り合い、紹介を依頼する、ロシアで最もポピュラーな SNS を通じての知り合いなど、取りうる様々な手段により、協力者や言語インフォーマントとの人脈を作った。現代生活においては、なかなか時間が合わないことや、とくにネネツ人の生活スタイルから常に都市部にいるわけでもないことがあり、短いロシア滞在期間ではなかなか時間が合わないことも少なくなかったが、こういった人脈は信頼関係が重要ということもあり、“渡航すること”そのものがフィールド調査の土台と言える。母語として流暢に民族語を操る話者は、現地では確かに多かったが、テキストを採集するに適した話者との巡り合いはまた別のことであり、文法確認や発音調査が主になった。テキストは二次資料によるものがまだ大きいと言える状況である。

エヴェンキ語のインフォーマントは、本課題の申請時点で予定していたエヴェンキ語恩師が急逝されてしまったことにより困難になった。サンクトペテルブルグの研究所や、ヤクーツクでのインフォーマント探しを行ったが、ネネツ語とは異なる語保持率の低さもあってか、うまくいかなかった。そのため、二次資料の収集を試みただけにおわった。

４．研究成果

本研究課題での成果としては、次の 4 点をあげられる。

① 現地調査での成果

本研究課題は、今後も続くシベリア地域における言語接触研究の基礎研究という位置づけである。インフォーマントのもならず、情報提供者として様々な方面への人脈作りはその初期段階のステップにして、重要なものである。その基盤作りという点では、成功していると言って良いであろう。

② 日本シベリア学会での発表と学際的な研究交流

本課題研究の開始時期を同じくして、2015 年に日本シベリア学会が発足し、本申請者も当初から関わることができた。2016 年の第 2 回の研究大会から 3 回にわたり研究発表を行った。言語学以外の、シベリアをフィールドとする研究者の集まりで、本研究課題の目的である学際的な関係を構築するとともに、言語学からの民族接触の可能性も示すことができたと言える。

③ シベリア関係を特集した書籍における執筆分担

2018 年に「東西シベリアの言語の境界―ツングースをサモエードの言語から見る民族接触の可能性」(『アジアとしてのシベリアーロシアの中のシベリア先住民世界』永山ゆかり・吉田睦編、勉誠出版、東京）を発表する機会を得て、ツングースとサモエードの民族接触の可能性を、エヴェンキ語とネネツ語の言語データを扱いながら述べた。言語学的な視点からまとめた内容で、本研究課題の目的としては完成といえるが、その他文化、民話、民間伝承的な相互民族のイメージというものもあるが、まとまった資料としてはまだ採集できていないので、今後の課題へとつなげていきたい。

④ ネネツ語の入門語学書・辞書の作成

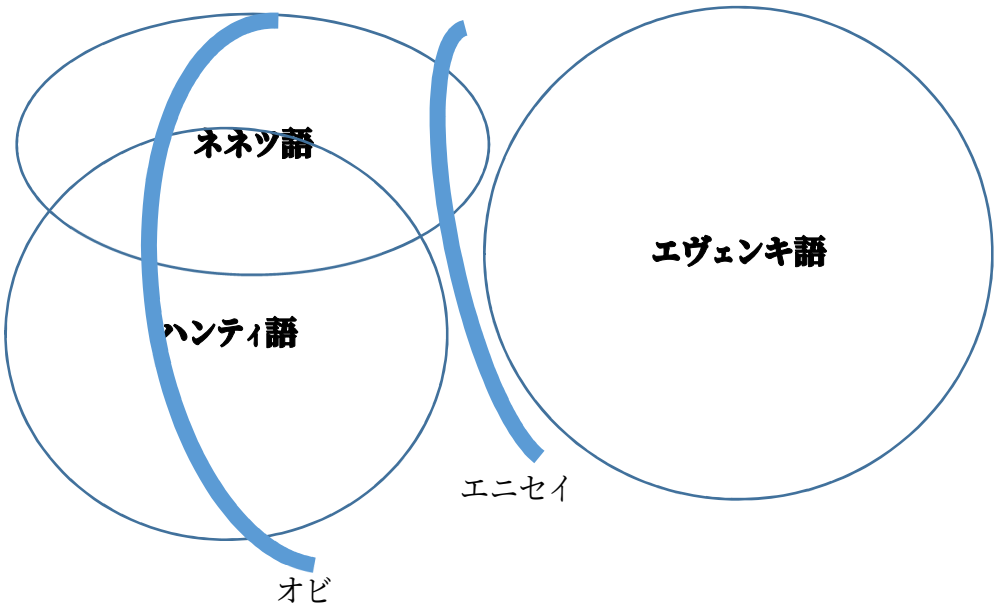
ネネツ語に関しては、当初からの目的であった、日本語による語学書・辞書を作成した。本課題研究期末の新型コロナウイルスの国際的蔓延のために、フィールドでの最終的なつめが間に合わず、現段階での可能な形（ver. 1.0）ではあるが、以下に目次をあげておく。内容が入門的なにとどまっており、もう少し文法事項を網羅的にし、練習問題や音声データを付けられたものを関西として今後も続けていく予定である。

第１課
　文の基本構造
　人称代名詞（主格）
　双数について
　述語人称語尾
第２課
　名詞の数カテゴリー：双数・複数主格形
　所有人称語尾
第３課
　名詞の曲用について
　名詞の格(1)：主格、属格、対格（I 型名詞単数形）
　動詞の活用について
　動詞の活用(1)　I 型動詞現在時制
第４課
　名詞の格(2)：与格、処格、離格、沿格
　名詞のタイプ
　名詞の格(3)：属格、対格（II 型名詞単数形）
　存在文
第５課
　動詞のタイプ
　動詞の活用(2)　I/II 型動詞現在時制
　名詞の所有人称曲用
第６課
　数詞
　勧誘法と命令法
第７課
　後置詞
　人称代名詞の曲用
第８課
　動詞の時制・アスペクトについて
　動詞の継続相の表し方
　動詞の過去時制　I/II 型動詞
　動詞の未来時制　I/II 型動詞
第９課

名詞の双数形と複数形（無人称曲用）
複数形対格のタイプ
複数形の人称所有曲用
双数形の人称所有曲用
第 10 課
否定文の作りかた
動詞の活用タイプについて
第２活用
第３活用
小辞書
ネネツ語-日本語辞書
日本語-ネネツ語辞書

⑤ ネネツ語を中心とした言語接触への視点移動

現地でフィールド調査をしていると、ネネツ語のほかに、ハンティ語やコミ語といった、ネネツ語の分布地域のより西や南の地域で接触している言語の重要性がわかってきた。特にハンティ語は居住地域が多く重なっており、実際の民族の村々も相互に分布する状態であることがわかった。こちらはオビ川を主な移動地域として分布しており、エニセイ川を含めた中央からにしシベリアの最北地域での少数民族の接触へと視点を広げることができた（下簡易分布図参照）。これは次の後継科研費研究プロジェクトで引き続き進めていく予定である。



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 松本亮	４．巻 227
２．論文標題 東西シベリアの言語の境界	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アジア遊学『アジアとしてのシベリア』	６．最初と最後の頁 146-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ryo Matsumoto	４．巻 VIII
２．論文標題 “It rains” in Uralic and Tungusic	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Studies in Asian Geolinguistics VIII	６．最初と最後の頁 43-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松本　亮	４．巻 21
２．論文標題 ハンティ語の音声音韻の特徴について－言語フィールド調査データからのまとめ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 神戸山手大学紀要	６．最初と最後の頁 115-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松本亮
２．発表標題 シベリア少数民族語の”語学”教科書の現状と傾 向について
３．学会等名 日本シベリア学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松本　亮
２．発表標題 ネネツ語の自動詞と他動詞の関係について
３．学会等名 ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ryo Matsumoto
２．発表標題 ‘It rains’ in Uralic and Tungusic
３．学会等名 「アジア地理言語学研究」共同利用・共同研究課題研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 松本　亮
２．発表標題 ウラル諸語の参照文法書について
３．学会等名 「参照文法書研究」共同利用・共同研究課題研究
４．発表年 2018年

１．発表者名 松本　亮
２．発表標題 ツングースとサモエードの民族接触の可能性
３．学会等名 日本シベリア学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 松本　亮
２．発表標題 ネネツ語の声門閉鎖音の音声的実現について～予備調査～
３．学会等名 ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究　最新の報告」
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考